

【主題】 学校行事改革への取り組みー その価値と課題 ー

【副題】 篠ノ井西小学校における2つの実践から

【学校・団体名】 長野県長野市立篠ノ井西小学校

【役職名・氏名】 校長・海沼 敦

I 学校行事をめぐる課題

運動会や音楽会については、これまでも、改善の必要性が指摘されていた。平成31年度職員会反省から、学校行事に対する校内の意見を大まかに整理してみる。

<児童の視点>

- ・毎日のように練習があり時間的にも体力的にも負担が大きい。また、多様な児童がいる中、特別時間割や長期間続く行事練習によって不安定になる児童や落ち着かなくなる児童への配慮が必要。
- ・個別に支援を要する児童が増える中、練習時間に職員配置等の対応が必要。

<カリキュラム編成の視点>

- ・体育、音楽、総合、特活などで時数カウントの工夫をしても、実際、多くの練習時間がかけられていること。
- ・「集団行動」の指導の必要性への疑問。
- ・発達に応じ適切なレベルの題材選定が必要。難しい運動や曲が児童への負担になっている。

<職員の視点>

- ・保護者に「見せる、発表する」ため、どうしても出来栄を意識した指導にならざるを得ない。
- ・保護者の問い合わせ、苦情への対応が増えている。
- ・諸会議、打合せ、資料作成、児童指導の準備に長い時間がかけられている。

このように見返すと、本校の学校行事の課題はコロナとは別に、その前からあったことが改めて見えてくる。これまでのありかたを見直し、新しいものへ変えていく必要性は、職員に共通する課題意識であった。

II 新しい体育的行事の創出

令和2年度の運動会は、コロナ禍にあり従来の運動会を変更せざるを得ない状況であった。その中で、篠ノ井西小学校では、体育係の職員を中心に「コロナ禍だけの一時的な対応ではない、新しい時代の体育的行事へと変えていきたい」との思いがあった。

言わば従来の運動会からのモデルチェンジである。

1 運動会からスポーツフェスティバルへ

令和2年7月に行われた本校の体育係による係会の検討資料を振り返ると、当時、体育係でどの様な議論がなされたかが見えてくる。

【令和2年度篠ノ井西小学校 体育係会資料より】

～新しい学校行事の創出～

1 立案の観点

- 新型コロナウイルスに対応すること。
- 行事で育てたい子どもの姿（目的）の見直し。
- 目的達成のための活動（方法）の見直し。
- 発達段階を踏まえた運動（内容）の見直し。

2 求められる条件

- 大集団での活動ではないこと。
- 長時間にならないこと。
- 体を動かすことで「楽しめる」活動であること。
- 発達段階に応じた活動であること。

3 新しい行事の創出に向けて

- 従前の運動会にとらわれずに工夫。今後、形態や内容の検討を重ねていく。
- 「運動会」という言葉は使わない。

2 スポーツフェスティバルが目指すもの

令和2年に始まったスポーツフェスティバルの基本計画には、スポーツフェスティバルが何を目指すかが示されている。

<スポーツフェスティバルのねらい>

- ・学年、連学年で競技をしたり様々な種目を体験したりすることで、体を動かすことの楽しさ、心地よさを感じる。
- ・種目や必要な係活動を考えたりすることで、主体的に行事に関わろうとする態度を育む。

職員の間でくり返し確認されたのは、「様々な運動に触れ体を動かす楽しさ、心地よさを感じる1日にしたい」「ゆくゆくは、保護者や見に来た皆さんと児童と一緒に運動に親しむ日にしたい」ということであった。

保護者へ事前配布したチラシには、次のような願いが書かれている。

【令和4年 保護者配付チラシより】

(中略) …状況の変化に対応しながら、運動に対する児童の意欲や一人ひとりへの配慮を大切にしたい新しい形の体育的行事として行います。願いは、友と競い合ったり運動遊びに挑戦したりすることを通して、体を動かすことの楽しさや心地よさをお互いが感じ合うことです。

くり返しになるが、スポーツフェスティバルは、コロナ禍における一時的な対応ではない、時代の変化に対応した新しい行事に変えていきたいという思いが込められている。

3 従来の「運動会」からなくなったもの

スポーツフェスティバルの創出により、従来の運動会から結果的になくなったものがある。

以下に列挙してみる。

- ・会 場：万国旗、本部テント、得点版、来賓・敬老席、長机、パイプ椅子、保護者席、児童椅子席
- ・係活動：進行係、放送係、運動係、応援団、得点係、音楽係、記録採点、装飾係、決勝審判
- ・種 目：準備運動、全校応援合戦、全校大玉送り、全校ダンス、来入児種目、選手リレー
- ・指 導：児童の赤白分け、応援団指導、朝のリレー選手指導、全体整列指導、児童の係活動指導、スローガンの決定、運動会の歌指導、朝の全校運動、全校種目の練習指導、来入児「招待状」作成
- ・儀 式：開会式、閉会式（学校長あいさつ、来賓あいさつ、選手宣誓、得点発表、万歳、運動会の歌、エール交換）など。
- ・準 備：職員係と係案の作成、係案審議、特別時間割の編成、児童係会指導
- ・事 務：来賓の受付、湯茶の接待

4 児童の様子

児童は、スポーツフェスティバルをどのようにとらえているだろうか。

【児童の日記より】

スポーツフェスティバルがありました。体育館の遊びは、けん玉がすごく楽しかったです。空中ブランコという技ができなくて悔しかったです。ボッチャでは、2連勝できました。一番楽しみだったのは逃走中です。様々なミッションがありました。6年生や校長先生、教頭先生がハンターでした。走るのが

とても速かったです。捕まったけれど、最後のミッションで復活し、生き残りました。とてもうれしかったです。連学年種目はチャレンジ・協力・スマイルが達成できたと思います。来年は僕たちが引っぱっていくので頑張りたいです。

運動会なのに「あやとり」や「カードゲーム」までやるのか、と思われた方もいるだろう。しかし、児童からは次のような声が聞かれている。

「は〜っ、めっちゃ運動した。ちょっと休憩。お茶飲みながらトランプやろ。」「私ね、走るのは早くないけど、けん玉得意だよ・・・ほらね。」「〜君の竹馬めっちゃ高い！あんなのできない！！」

スポーツフェスティバルで設定されている様々な運動は、一人ひとりの「やりたい、できる」を実現する場にもなっている。

5 その後の広がりとは今後の可能性

スポーツフェスティバルの取り組みは、学年相互に波及している。後日、他学年から「やってみたい」との声があがり、体育の授業や朝の活動で楽しむ姿が見られた。

【2年の学年通信より】

スポーツフェスティバルで5年生がやったゲーム（逃走中）が好評で、是非、全学年が体験したいということになりました。2年生は朝の時間に「逃走中」をやりました。（中略）何ともハラハラする展開、広い校庭を一生懸命走る子どもたち。今回の「逃走中」のようにルールや設定を少し工夫してやるだけで、何倍も盛り上がることを感じました。「今度は先生がハンターになって！」と言うので、担任がハンターになり大いに盛り上がりました。

他にも、他学年のダンスに挑戦したり、ボッチャやジャンボバトンリレーを楽しんだり、当日だけで終わらず広がりを見せた。また、いくつかの遊びが「篠西小運動マップ」へと再整備され、休み時間にも遊べるようになっている。

以上、新しい体育的行事について述べた。

スポーツフェスティバルとなったことで、今後、例えば、地域の総合型スポーツクラブと連携したヨガコーナー、地元プロサッカーチームと連携したフットサル体験なども構想することができる。現在コロナにより児童だけになっているが、将来的に保護者や地域の皆さんと共に運動に親しむ日にできる可能性を持っていると感じている。運動会からスポーツフェスティバルにすることで、学校自己完結型の行事から、地域に

開き児童が地域の皆さんとスポーツを通じて交流する行事へと広がる可能性も見えてきた。

Ⅲ 新しい学芸的行事にむけて

1 音楽会のあり方の模索

令和元年度までの音楽会の概要は以下のとおりである。かつて1000人を超える児童数であった本校が、学校規模、施設上の課題、地域性やこれまでの経緯から、この形が作られてきた。

【令和元年度 篠ノ井西小学校音楽を聴き合う会、音楽会】

<日程>

初日 午前 音楽を聴きあう会(児童の音楽会)

2日目 午前 音楽会(保護者対象の音楽会)

<基本ステージ数> (2日ともほぼ同様)

・全校合唱(入場曲、全校合唱、呼びかけ等)

・1～6学年(2クラスごと)11ステージ

※1～4年は、歌と合奏の両方を発表

・全校の合唱奏(2日目の保護者向け)

・職員演奏、合唱(1日目の児童向け)

・和太鼓クラブ

・合唱団

・エンディング(ふるさと 中国語も含む)

<鑑賞の形態>

初日 全校児童が体育館に入場し演奏・鑑賞。

2日目 保護者が体育館に入り、児童はステージ順に入場し演奏。ステージ終了後は退場。児童は教室でテレビ視聴など。

国際色豊かな学区の地域性からエンディングでは全校合唱「ふるさと」を中国語で歌うなどの場面もあり、例年、職員からも「感動的な音楽会であった」「どの学年もそれぞれに良さがでていて素晴らしいステージであった」「互いの発表を聴く場があり、保護者に聴いてもらう場があり、子どもの励みにもなった」「音楽ができる幸せを感じられ大変素晴らしい会であった」との声が聞かれていた。

一方、冒頭で述べた課題も含め、長い練習期間、多くの合唱・合奏練習、他教科の授業時間の確保、児童の負担、2日間にわたっての開催などが課題となっており、職員からはあり方を見直す意見が聞かれていた。

職員の間で意見がありながらも、音楽会のあり方を見直すことは様々な要因が絡まりなかなか進められなかった。それは、令和元年度(平成31年)の音楽会

基本計画の「申し合わせ事項」からもうかがえる。

【音楽会の申し合わせ事項】

(略) 他教科の指導時数を確保するため、児童の負担軽減のため、今年度より発表内容を大きく変える。これについては、年度当初、4月のPTA総会にて学校長が伝えているので職員も共通理解して臨み・・・(以下略)

学校行事をどのように計画するかは、本来は学校が主体性をもって決定してよいことであるが、音楽会の内容変更を「PTA総会の場で学校長から伝えている」ということから、背景に「保護者の期待」があり、学校行事を変えていくことの難しさがうかがえる。

以上の校内的な課題を抱えつつ、令和2年度の音楽会はコロナ禍もふまえて何とか実施できるようにと模索された。そして、令和3年度より「音楽をたのしむ日」の形となっていた。

2 音楽をたのしむ日へ

新しい音楽会の原型は、以下のように提案され、その後、令和3年度から「音楽をたのしむ日」と名称を変え、令和4年度で2年目を迎えた。

【篠ノ井西小学校 音楽をたのしむ日】

<新しく加わったねらい>

友達と協力して練習する中で、仲間と創り上げる楽しさを味わう

<スケジュール>

事前 授業時間内で「音楽を聴き合う時間」とし練習場を学年相互に鑑賞する。

当日 午前 音楽をたのしむ日(保護者鑑賞)

・学年とその保護者で行う。

・保護者は交替で入場鑑賞する。

・進行等は学年で行う。

<ステージ>

・開会 ボディーパーカッション 2分

動画編集して全校がコラボ演奏

・学年ごとに15分程度の会とする。

様々な児童に配慮し、教科書教材と同じ程度の選曲にする。無理のない曲を無理のない範囲で取り組む。

・進行等は学年で柔軟に進める。

3 音楽を「創り上げる楽しさ」の議論

「音楽会から『音楽をたのしむ日』にした方向でよい」といった声は、日頃から児童の様子を見ている多

くの職員から聞こえてきた。内容や開催方法を変更したことの良さが、児童の表情や期間中を含めた学校生活の様子から感じられるようである。

一方で、行事練習に苦しみ不安定になる児童もまだまだ見られ「音楽行事で何をねらい、そのためにどうするのかについて、さらに考えていく必要がある」との意見もあった。これに対しては「一人で出せない美しさ、合わせる楽しさ、上手にできるようになった楽しさのためには、ある程度の練習や習熟が必要であり、一定期間の積み上げが必要」という意見もあり結論は出ない。ねらい「友達と協力して練習する中で、仲間と創り上げる楽しさを味わう」を、具体的にどのレベルでイメージしているか、今後も職員で意見交換していく必要がある。また「コロナ後は徐々に人数を増やしていきたい」との意見もあり、行事に対する職員の意識も一様ではないことが見えてくる。

IV 2つの実践の価値と可能性

以上2つの学校行事の実践は、どのような価値を持っているであろうか。

「長野県教育振興基本計画」には「個別最適な学びと協同的な学びの一体的な充実」とともに、次の言葉が掲げられている。

個と社会のウェルビーイング
一人ひとりの「好き」や「楽しい」を
とことん追求できる「探究県」長野の学び

これを読み、「果たして本校の学校行事はどうかののだろうか」との疑問が出てくる。ここはあまり難しく考えることなく、あえて自己評価するなら、本校の取り組みは「児童一人ひとりの好きなことや楽しいことを実現するスポーツフェスティバル」であり、「多様な他者を受け入れながら合奏や合唱をたのしむ日」と捉えさせていただく。将来的には、児童と保護者・参観に来た方が共に運動をたのしむ「個と社会のウェルビーイングなスポーツフェスティバル」の可能性さえある。

V 学校行事改革の課題

最後に、スポーツフェスティバル初年度の保護者アンケートの結果を示す。長いページを割き、その良さを述べてきたが、スタート時はこれが現実であった。

【令和2年度 スポーツフェスティバル保護者アンケート】
◆スポーツフェスティバルはどうでしたか？
よかった…168人 よくない…19人

どちらともいえない…106人
◆コロナ禍が収まった場合、どのような運動会が良いですか。
スポーツフェスティバルなどの形 …81人
これまで通りの運動会 …202人
(令和3年度4年度はアンケート未実施)

この数字を見て、私たちは冷や水を浴びせられるような思いを抱いた。

先にも述べたが、学校行事の背景には保護者の期待がある。教員の側にも「学校の取り組みを保護者にも喜んでもらいたい」という思いがあり、保護者の声は、時に、助言・応援として教員を戒め、時に教員のやりがいとなっている。また、地域の期待が大きい学校もあるだろう。その中には「〇〇小の歴史」や「これまで大切にしてきた経緯」といった、学校活動に関わる「伝統や慣例」があるかもしれない。

学校が安定的に教育活動をすすめるには、保護者・地域と良好な関係を保つ必要があり、こうした保護者・地域の声を軽んじることはできないのだが、ここに、学校が変わらない（変わらない）難しさがある。保護者の期待や学校の慣例に縛られるばかりでは、学校は何も変わらないし変えることはできないのではないかと。

学校はまず、学校行事のねらいに立ち返りたい。「この行事は何のためにやっているのか」「そのねらいならもっと良い方法はないか」「始めた当時は有効だった内容かもしれないが、今の子どもたちに合っているか」等を考える必要があるのではないだろうか。また、保護者の声を過度に不安がらず、学校行事を変えたねらいや価値を、保護者に対して丁寧に繰り返し伝えていく必要はないだろうか。教員も保護者も、求めているのは子どもの健やかな育ちの姿である。新しい学校行事の良さを、子どもの姿で保護者に示し納得していただく努力を続けることも必要であろう。

我々教員一人ひとりは、善意の上に立って教育に取り組んでおり、改革への理解は必ず得られるはずである。本校の学校行事も今後どのようなことになるか見通せない部分もある。しかし、改革を進めるのも止めるのもあるいはコロナ前に戻るのも決めるのは現場の我々ではないだろうか。

(教頭 二宮 聡志)